
錬金の守護騎士

猫飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金の守護騎士

【Nコード】

N5393J

【作者名】

猫飯

【あらすじ】

若い錬金術師の青年ケイリスは、とある精霊からもたらされる病を治しながら旅をしてきた。その途中に助けることになった守護騎士ガロンと共に錬金術を禁忌とし排他してきた王国の都に向かうことに。

人間と精霊が共存する世界で繰り広げられるファンタジー。

プロローグ

わずかな明かりしか差さない一室の中で、立派な白い髭を蓄えた老人は腰に付けている剣に手を伸ばした。

拙い、と老人は思う。自分の目の前で霧状からヒトの形状を取ったモノを見て明らかな実力差を感じていた。歳を取ったこの身体では止められないと。

すでにこの一室に老人が入ってから二晩が経過している。暗闇の中で見え隠れするモノについてどうすればいいのかを考える。たぶん、どのような答えを出したとしても己はここで朽ちることになる、と老人は思う。

目の前にいるモノにいるものは人間で言えば生まれたばかりの赤ん坊だ。何がイイコトで何がワルイコトが分からない、禁忌を犯した者が生み出した罪のない子供である。しかし、その力は強大すぎた。目の前にいるモノは老人を眺めているかのように其処でゆらゆらと浮いている。

老人は剣の柄を握る手に力を籠めた。どこまで通じるか分からないが、このまま外に出すわけには行かない。

「……………さま……………お師匠さま……………」

誰かが自分を呼ぶ声がして、老人は剣の柄から手を離し、周囲を見回す。もちろんこの一室の中に誰かがいるはずはない。老人は封印を掛けたはずの扉に目を向けた。

「……………ケイリス？」

「お師匠さま！」

老人が声を掛けると、弾んだ声が戻ってきた。重い鉄の扉に遮られ、顔を見ることは出来ない。だが聞こえてくるその声は、共に旅してきた少年のものに違いなかった。

「……よかった。ご無事だったんですね、お師匠さま」

「わしがそう簡単にくたばると思うたか馬鹿弟子。それよりもわしが掛けた封印はどうした？」

「……えっ？……あれ、封印だったんですか」

その言葉を聞いた老人は頭を抱えた。今回掛けたものは、目の前にいるモノを決して外に漏らさないようにと強固に設定して作り上げた封印だったはず。それを簡単に解いたという少年の実力になんか少しだけ恐怖し、……安堵した。

自分がここで朽ちても、共に旅して、共に苦難を乗り越えてきた愛弟子がいる。

老人の顔に自然と笑みがこぼれた。

「ケイリス……」

「はい！」

「後は頼んだぞ」

弟子の返事を聞く間もなく老人は腰に携えていた剣の柄を握り、目の前のモノに突き刺した、そして始動呪文を唱える。発動した呪文は暗闇に包まれていた一室を、目を開いていることが出来ないくらいの閃光で包み込んだ。

少しして重い鉄の扉が開かれた。

両手と額から血を流しながら少年は一室に入り込んだ。

そこに師匠と呼んだ人はいない。残されたのは血の様な紅い色をした少年の掌に乗るくらいの水晶が転がっているだけで、少年はそれを拾って握り締めた。

手酷く破壊され天井だった所から見える太陽を見ながら……

プロローグ（後書き）

感想お待ちしております。

錬金術とは、この国においては持ち込むことも使役することも禁忌である。

男は獲物を探して見つけた。壁に立てかけられていた長い棒を片手に息を殺して、呪文を唱える黒髪の青年に近づいていく。そして勢いよく振りかぶり、脳天から重い一撃を喰らわせた。

倒れこむ青年。その衝撃で錬金釜に入っていた緑色の液体がこぼれて、床について固まった。

男は青年に近づき止めを刺そうとする。そこに扉を開けて入ってくる人影があった。

男は急いで振り向き棒を構える。が、いたのは緑色の飴を片手に首を傾げるようにして立つひとりの少女。

「ケイリス兄ちゃん、また転んだの？」

男は固まった。もちろん青年を討ち取った凶器を片手に。

少女の手から飴が零れ落ち、両手が口に添えられる。

次の瞬間には甲高い泣き声と共に隣の部屋にいた大人たちが流れ込んできて、男は取り付く暇もなく取り押さえられた。

頭に包帯を巻かれた黒髪の青年は苦笑いしながら男の傷に治療薬を塗っていた。

「ガロンさんは悪くないですよ。僕が錬金術師だっというのは合っていますから」

「しかしだな。疫病が蔓延し、王国の者も見捨てたこの地に態々入り込んで治療を行っていたお主にわしは……なんということを」

「大丈夫ですよ。こんなこと日常茶飯事ですから。こう見えて打たれ強いですよ、僕」

「それは大丈夫とは言わんぞ」

「ガロンさんこそ、ニエルの森にひとりで入るのは危険ですよ。あの時、僕が来なかつたら今頃魔獣の餌になっていたかもしれないですからね」

「うむう」

ガロンは肩を大きく落とした。

今身体に塗られている治療薬の効果は抜群としか言いようがない。大きくて深い傷は時間が掛かるらしいが、細かい切り傷や擦り傷といったものは目立たなくなるほどにまで治療されている。

王都にある薬ではこうはいかない。

治療能力を増大させるニエルの森の奥地にあるハイエン草は、王国に生きて護っている騎士たちにとっては必要不可欠なものであるのだが、最近魔獣の増殖率が高くて並大抵の騎士では返り討ちに遭うことが多くなってしまうため、ガロンに白羽の矢が立ったのだ。しかし…

「わしまで負けてしまったては……」

「ハウレン草なら大量に生えていますよ。この診療所の裏に」

「は？」

「ハウレン草はこの治療薬を作るのに必要不可欠ですし、安易に手

に入る上、栽培も簡単な錬金術の材料ですから」

「何処でも育てることが出来るのか？」

「栄養たっぷりの土に植え、日が良く当たり、綺麗な水を与えて、一週間もすれば　　って、ガロンさん！」

ガロンはがっくりと前のめりになり床に倒れた。ケイリスが「仕方ありませんよ」と声を掛けようとしたが間に合わなかったみたいで、嗚咽の入った野太い泣き声が診療所に響き渡った。

「ケイリス兄ちゃん、おじさんをいじめちゃ、めっだよ」

「わかっているよ。イニスちゃん」

「わかればよろしい。はい」

と、胸を張った後に両手を差し出した少女の手に、緑や赤といった鮮やかな色をした飴を渡すと鈴のなるような声で笑い外に駆けて行く。

椅子に座りなおしたガロンは少女に柔らかい微笑を向けるケイリスを見ながら思う。

なぜこの国は錬金術を禁忌としているのか、と。

確かに錬金術は危険な面も持ち合わせているが、こっやって人々に笑顔を与えることが出来るものだ。頑なに否定し続けるようなものでもない。

此処にいる間だけでも子供の病気や作業をしているの怪我など様々な患者が来たが全て完治させている。そして、肝心の疫病に罹りケイリスを尋ねてきた親子も治してしまっている。どんな薬も効かなかった病を一瞬で。

その力が駄目なのか。それとも自然から外れていることが駄目なのか。

ガロンには判断できなかった。

「ケイリス兄ちゃん！」

扉を開けて飛び込んできた人影はケイリスの足にしがみついた。

「イニスちゃん、どうかしたの？」

「まじゅー、いっぱいきた！」

ガロンは魔獣という言葉聞いた瞬間、自分の装備のひとつである小さな盾を取り外に駆け出していた。ケイリスも外に出ようとして、踏みとどまりバツクの中から紅い水晶を手を取った。

「ケイリス兄ちゃん？」

「うん。行こう」

ケイリスが手に取った紅い水晶が妖しい光を出して鼓動し始めた。それに彼はまだ気が付いていない。

A c t ・ 0 1 (後 書 き)

続
く
み
た
い
で
す
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5393j/>

錬金の守護騎士

2010年10月18日22時32分発行